カオスを組織する

1993 年『ACRYLART・ｱｸﾘﾗｰﾄ 1993』所収。ﾎﾙﾍﾞｲﾝｽｶﾗｼｯﾌﾟﾚﾎﾟｰﾄ

現代美術において、この 50 年ぐらいでの間に私たちが体験した出来事の中で、最も大きな出来事は何だったろうか。

それはミニマルアートであったろう、と私は思う。一般的に言われるように、私たちがミニマルという極限的に禁欲的な時代を体験した、というような意味ではなく、ミニマルアートの極限にまで切り詰めた表現、様式の中にさえ私たちが「美術」や「絵画」という私たち自身の視線の中にある「制度」を見てしまう、その「制度」の堅固さこそ重大である、という意味で。私たちは、何か目新しい様式や方法論を持ち出して過去の制度を葬り去ろう、などという近代的な幻想はもう持てない。勿論、過去の様式をつなぎ合わせて「ポストモダン」などとウソぶくことは論外であるが、「絵画」というものを今までのように、新しい様式で過去を常に乗り越えていくものとしてではなく、私たちの視線の中に住まう「概念」として意識すべきなのだ。

絵画というものは、実は「もの」ではなく、その歴史的な背景を背負った私たちの観念の中に住まう概念である。従って私の表現するもの（絵画）は、意図する、しないにもかかわらず私の持っている「絵画」という「概念」の表明となる。勿論そこには感性であるとか、技術であるとか、様々なものが見え隠れするだろうが最も根本的な事は、私の作品が成立する地平、つまり「美術」であるとか「絵画」であるとか、を私がどう考え、感じているのか、という事だ。近代絵画を学ぶ過程で私が身につけた、絵画の美しさであるとか豊かさであるとか、を捨象したところにあらわれる「絵画」の像を私は見てみたい。ミニマルアートのような禁欲的な表現でもなければ宗教的な滅私奉公や悟りのようなものでもない、自我というやっかいな近代のドラマを捨て、世界との関係性の生き生きと遊ぶ私がそこにいるはずだ。そのような表現を私はしていきたい。

具体的には、例えば 70 年代初頭のフランスで組織された絵画実践『シュポール/シュルファス』のように、『表面/支持体』という絵画の中の意味作用を一義的に還元せずに、それらの意味作用を差延化していくような方法が、方法論のひとつとして有効だろう。実践としての『シュポール/シュルファス』がどのような実りを残し、どのようにして解体していったのか、いまだ十分に検証されず疑問の余地があるとしても。作品形態や様式、素材などが作品の表面や内容、色彩などと切り離されたり、そのいずれかに還元されたりするものではなく、それらの意味作用が関連しながら世界に対して引き起こすカオスを組織してみたい。